

中野香織
「ファッション歳時記」
123

文化の発信拠点と なるホテル



2021年2月に開業した「ザ・レインホテル京都」のロビーとレストラン

4年ほど前からホテルのアドバイザーを務めていることもあって、各地のホテルに泊まって調査を重ねてきました。ホテルはライフスタイル全般、つまり衣食住・音楽・アート・香りなどに対するセンスが総合的に表現される場でもあり、逆にいえば、戦略をもってプロデュースされたホテルからは、新しい時代感覚を学び取ることができるのです。

ただ、「どこでもいいや」と泊った場所も含めて、旅先の記憶の多くが宿泊先の印象に左右されることも、まぎれない事実でしょう。

「フォーブス」の格付けで「5」や「4」の星をとるホテルは確かに、そこに滞在するためのだけに旅するに値する施設です。その種の高級ホテルはいずれ劣らぬ極上のホテル体験を提供してはくれるのですが、時間が経つてみると、どこがどこだったか区別がつかなくなってくる場合があります。世界に通用する最高のラグジュアリーを

演出しようとする、結果として似たような印象になってくるのかもしれない。トルストイの「幸福な家庭はみな似ているが……」という名言を思い出します。

一方、この数年で存在感を發揮しているのが、コンセプトをとがらせ、オーナーや経営者の思想を鮮明に打ち出したホテルです。まだ20代の龍崎翔子さんがプロデュースする六つのホテルは「ソーシャルホテル」というコンセプトを掲げ、新しいホテル文化を先導しています。ほかにも各地に続々とニュータイプのホテルが建設されておられますが、たとえば、最近、縁あって宿泊した京都の南区に新設された「ザ・レインホテル京都」も、突出した印象を残しました。

北欧風インテリアの部屋には、ぎりぎり最小限の家具とアメニティしか置かれていません。しかしそのひとつひとつが高品質で環境にも優しい製品、という基準で選び抜かれた最先端のもの。ミニマリズムの精神は、レストランにも反映され、夕食には重点が置かれませんが、朝食には北欧スタイルの豊富なメニューがbuffet形式で提供されます。館内にはアートが飾られ、屋上のバーは宿泊客同士が交流する場になっています。

京都の南は、殺風景ですが、今後、芸術系の施設が続々参入し、アート地区になる予定です。ホテルを建てたオーナーの意図は明確です。「シヨウドイツの「エース」か、ブルックリンの「ワン」のようなホテルにしたい」。前衛アーティストが拠点とするディープな街で、新しい文化を発信するホテルにしたい、という意味です。場所もクセが強く、コンセプトも尖っており、ここを選ぶ人は限られるでしょう。しかし「ある層には選ばれないこと」もまたホテルにおいては重要なのです。

衣食住に対する思想を詰め込んだホテルは、人が作ります。そこに共感する人が集まり、個性的な文化が生まれ、それが土地の魅力にもなっていきます。無難なビジネスホテルも悪くはないですが、富山からの新しい文化の発信を考える時、強いコンセプトをもったホテルの可能性も考えてみませんか？



なかのかおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「「イノベーター」で読むアパレル全史」（日本実業出版社）、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」（吉川弘文館）ほか多数。